

氏名	ヤマモトクミコ 山本久美子
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第326号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉日常収集：立ち位置、日常収集：かみのけ、日常収集：思い出 〈論文〉レイヤー表現：リズム・ゆらぎ・ズレ
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 坂田哲也
（論文第1副査）	〃 〃（ 〃 ） 佐藤道信
（作品第1副査）	〃 〃（ 〃 ） 工藤晴也
（副査）	〃 准教授（ 〃 ） O JUN
（ 〃 ）	〃 講師（ 〃 ） 齋藤芽生

（論文内容の要旨）

本論文は、「魅力的なもの」を表現するための一つの方法として「レイヤー表現」について考察したものである。「レイヤー（layer）」とは、重なった、層あるいは段になったもの、またはそのイメージ全般を指す。本論ではレイヤーを表す類義語を多用しているが、私の一連の作品の総称を「layerシリーズ」とし、重ねを感じさせる表現を「レイヤー表現」としている。「層」は物体そのものを表し、「重ね」は重ねる行為とその結果としての層の両方の意味を含む時に使用している。このことを踏まえ、本論を展開していく。

私は2005年から、主に紙を用いた作品を制作している。この表現は、紙を積み重ねて形を削り出す方法によって、「重ね」のイメージを視覚化する試みである。またそれ以前の自身の制作に対する疑問から、絵画への執着と思い込みをリセットし、自身の新たな可能性を見出すためである。身近なもの（紙）を別の形で提示する（積み上げて、切り／削り出す）ことによって新たな価値を与える、そこに面白さを感じて制作を行ってきた。

私が作品を作る理由は、自らの手による「魅力的なもの」が見たいという欲求からである。心血を注いで制作した作品が、さらに鑑賞者にとっても魅力的なものになれば、これほどの喜びは無い。それが、私が作品に期待することであり、制作意欲の源にもなる。このことは芸術における価値、もっと簡単に言えば「作品を見て魅力的だと感じるのは何なのか」という、私が作品を制作する上で常に解き明かしたいと思っている問いでもある。この極めて感覚的で抽象的な問いに答えるため、私は現在「レイヤー表現」を選択している。なかでも「リズム」「ゆらぎ」「ズレ」は、「レイヤー表現」による作品を「魅力的なもの」にするための手掛かりだと考えた。またこれらは、相互に密接に関係するものでもある。本論文ではレイヤー表現を基軸に、「リズム」「ゆらぎ」「ズレ」の関係を踏まえ、作品を「魅力的なもの」へ昇華させるための方法を考察することを試みる。

第1章：「layer」への道程－自己表現の展開

本章では、「layerシリーズ」に至る経緯を時系列に述べ、自作品の表現の展開について考察した。「layerシリーズ」に至る以前の作品には、無自覚的であるにせよ、すでに「重ね」が現れている。それは、私の気質そのものに「重ね」への志向があったことをうかがわせる。そして、芸術に対する消化しきれない思いと焦りによって絵画からの転換をはかったことが、結果的にレイヤー表現を意識することにつな

がった。「layerシリーズ」以後は、紙を重ねることによって、いかなる表現が可能かという研究を重ねている。それが提出作品《日常収集》へと展開してゆく。

第2章：「layer」－重ねのリズム

本章では、「重ね」が含む様々な要素の中から、行為と時間に焦点を当てて考察した。第1節「行為としてのレイヤー」では、行為の繰り返しに伴う「リズム」についていくつかの事例を挙げた。それらの「リズム」が、癒しの効果やセレンディピティを生み、世の中の“当たり前”に対する違和感を気付かせること、またそこから新しく世界を見るきっかけとなることなど、肯定的な面を強調した。

第2節「重ねのリズム－時間の経緯」では、時間の重厚さと流動性という、相反する要素でありながら共通性を感じさせる魅力について述べた。さらにこうした魅力を「ゆらぎ」という観点から考察し、また美術作品における魅力が何かを「ズレ」の観点から言及した。重ねる行為自体が「ズレ」を生じさせるものであるのだが、作家には「ゆらぎ」を生み出すために、何をどのようにしてずらしていくかという志向が求められていると思われる。

第3章：「日常収集」

本章では、提出作品《日常収集》について解説し、第2章で述べた「ゆらぎ」がこれらの作品にどう帰結したのかを述べた。《日常収集》の中の《立ち位置》《かみのけ》《思い出》の3点は、紙を重ねるといふ枠組みだけを残し、それぞれに異なるアプローチのまま完成に至った。作品のモチーフは各パーツに分断され、完結した作品自体もモチーフとなり、組み合わせられるというフレキシブルな状態になっている。視点をずらしていくことで《立ち位置》《かみのけ》《思い出》の3点は独立した作品となり、また《日常収集》という展示空間に「リズム」を生み出すひとつの作品ともなる。

終章

本章では、本論文の全体を振り返り、まとめと共にレイヤー表現による「layerシリーズ」の今後の課題および作品展開について述べた。このレイヤー表現を通して、平面作品では得られなかった、物体としての実感と彫刻的技法による新鮮な体験を得たことが、私の制作意欲を復活させた。それがこのシリーズを続けて来たひとつの理由とも言える。繰り返し続けていくことで生じる「ズレ」に対して、自身の好奇心や疑問に素直に反応し、ある地点で振り返りながら考察する。その積み重ねが、私にとって作品を「魅力的なもの」にするための地道な方法なのである。

「重ね」は次のステップに上がるための階段でもある。目的をもって階段を上がるのも良いが、上に立ってみてはじめて見える景色に期待をしたい。理性ではなく直感に訴えかけてくる作品、これこそが私の芸術なのだと確信し、本論の結びとする。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、油彩による絵画制作に行き詰まりを感じた筆者が、紙を重ねて成形するレイヤー表現に新たな可能性を見出すにいたった経緯を論述したものである。造形者としての自らの迷いと試みを、率直に吐露したリアリティの高い論述は、好感を抱かせる文章になっている。

小さい時から絵を描き始め、抜群の才能を示してきた人々にとって、「なぜ絵を描くのか」という問いへの答えは、つきつめれば「描くことが好きだから」という一点に集約されることが多い。しかし多くの場合、同じような人々が集まる美大入学後に最初の壁につきあたる。筆者もまたそうで、様々な試みをしてみるがしっくりこない。そうした中で、新聞紙がテーマとされたグループ展で、積み上げた新聞紙を人型にザックリと成形した作品（「層」2005年）を制作したことが、筆者の転機となる。これがレイヤー表現の始まりだった。

層を重ねていく作業は、単純なくり返しの作業である。そうした行為は、無心になることでの癒し効果もあるが（たとえば手芸の編物のように）、筆者にとってじつは性格的にも合っていたらしい。水彩から油絵に変わり、気がすむまで「ねちねち」と描くタイプだったという筆者にとって、層を重ねていくレイヤー表現は、行為が形になっていく実感を伴うものだったのだろう。同時に筆者がかつて共感した、高校の美術教師のことば「油絵というのは塗った絵具が無駄にならない」という性質にも、レイヤー表現が合うものだった様子が窺われる。ここから筆者は、層を重ねることが、年輪や地層などのように時間の経過と歴史になっていくことを確認し、レイヤー表現に確かな手応えを感じていく。

しかしここでもう一点、筆者がレイヤー表現に込めようとしている重要な要素が、規則正しいくり返しではなく、ゆらぎながら少しずつズレていくくり返しのリズムである。それが本論文のサブタイトルにいう「リズム・ゆらぎ・ズレ」であり、これが作品に魅力をもたらす要因になると筆者は考えている。実際、重ねた新聞紙を人型にザックリと成形した、前述の「層」や「layer08」（2008年）「立ち位置」（2010年）といった作品の一方で、カラーペーパーによる「微笑」（2007年）「手」（2008年）、提出作品の「思い出」（2010年、「日常収集」3点中の1点）などでは、層の線が等高線のように流動している。また「立ち位置」「思い出」「かみの毛」の3点からなる提出作品「日常収集」では、3点をフロアと壁面にインスタレーションとして配置することで、作品単体ではなく空間としてのリズムと動き（ゆらぎ、ズレ）を表現している。

筆者にとってこのレイヤー表現は、彫刻的な物体の実感を得た新鮮な体験として、制作意欲を復活させた。しかしそこに見出した可能性は、絵画との決別ではなく、むしろその将来につながるものとしてあるようだ。レイヤー表現は、いわば筆者の絵画の過去と未来をつなぐ実験としてあるのだろう。そのプロセスとしての本論文と作品じたい、高いリアリティと造形的強度をもっているため、これをステップにした今後の展開も期待される。筆者自身の内面に真摯に向き合った論考として、審査員の好感と高い評価を得た。

（作品審査結果の要旨）

「日常収集」と題された作品は、「立ち位置」「かみのけ」「思い出」の三部作からなり、大小様々の形態による作品群によって構成されている。山本 久美子さんは、修士課程在学中に新聞紙を高く積み重ね、それを削り出し、人物の立像を制作した。新聞紙という媒体を積み重ねることによって全く別の形を提示する「layerシリーズ」として連作を始めたもともと初期の作品である。博士後期課程ではその表現に変化がみられ、紙の層に色彩が加わり、表現がより技巧的になり、絵画としての平面性を強く意識するようになっていった。

「立ち位置」と題された作品は、スカートをはいた女性の両足が二段重ねになったユニークな形態で、新聞紙を厚く積み上げて削り出す手法は、修士課程で行なった試行の延長線上にある作品といえよう。また、「かみのけ」も色刷りのチラシを重ねたことによる色彩が加わるが、前述の作品同様に極力作為的行為を排除し、現れる形態の奇妙さの裏側に潜む本質を見る側に問いかける作品である。これらの作品は、新聞紙やチラシを媒体として自己の内面的問題を映し出し、人間社会における女性である自我を強く示唆するメッセージ性の高い作品である。しかし「思い出」と題された作品群は、前述した二点の作品とは異なり、色の層にこだわり、それを削ることによって現れる形、いわば偶然性と描く行為を重ね合わせることを意図した作品である。色の着いた紙の層に厚みはなく、一枚の絵であり模様のようなものである。中でも（泳ぐ魚）と題された三点の作品は、魚影や水面の情景を色の着いた紙の層を削り出すことによって描き出した極めて技巧的な作品である。（トリップ）（落ち葉／集積）（影）と題された作品は、重ねた紙の厚みを打ち消すように薄い板状に削り出し、色の層と平面の輪廓のみを強調する。葉のような薄い形状や実際に物質ではない事柄を扱うことで平面化に突き進み、絵画をレイヤー表現によって組

み立てようとする新たな展開がみられる。これらの作品は、重ねる行為と色彩が平面という物体の中で如何にして絵画として成立するかを実証しようとした試みである。

以上のように、紙を重ねることから出発し、絵画の平面性と物質の存在という二元性の中に自己の表現を求める研究を行ってきたが、極めて独創的な表現手段によって独自の表現領域に到達し、さらに試作を繰り返しながら新たな表現を探求する内容は高く評価できる。「日常収集」と題された一連の作品は、博士号取得の水準に充分達しているものと審査にあたった教員全員が認めたことをここに報告する。

(総合審査結果の要旨)

山本久美子は、東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程油画研究領域の学生として第六研究室に所属している。2005年制作の「層」という新聞紙を積み重ね人型に削り出した、ダイナミックでザックリとした質感の立像で、藝大大学院修士課程に突如として登場してきた。古新聞紙を幾重にも積み重ね、のこぎりやカッター等で人型に彫り出している。この朴訥な立像の灰白色の地層のような表層と、引きちぎられたような紙の質感の末端はふるえ、呼吸しているようにも感じられ、実にいい作品だったと記憶している。

山本さんはそれまで描いてきた油絵にどこかしっくりと来ない納得のいかないものを絶えず感じていた。私の目指すものはこの表現方法ではないと。帰省の折に実家で古新聞の山積みされた状景を間の当たりにした。これが発想のきっかけとなり「層」への制作をうながし、そこからレイヤー表現の可能性を見出し、今後の作品にまで展開していくことになる。

参考文献資料も、的確に掲載されていて読み解きやすい。一人の若い作家が人生や制作への葛藤を自分史を語るようにリアリティを持って論じられており、共感に値するものである。

作品のことに触れるが、素材として使われる新聞紙やチラシ、色紙など偶発性を装いながらもねらいすまして重ねていく一連の作業自体は、実は地道な作業の繰り返しである。しかしそうした人知れず仕事に向おうとすることは作者の性格にあっていて、チェーンソーやのこぎりや、サンダー、カッターで削り出し像を彫り出していったあと、色彩が等高線のように現われて美しく響き合い、自身の目指した造形にもっていく時、作品は息づいてはじめて作者ならではの幸福感と達成感を感じるのだろう。

こういう一連の繰り返しの作業の中から山本が見出し気づいたのが、作品に潜む「魅力的なものとは」との問いかけに対する「リズム・ゆらぎ・ズレ」という答えに他ならない。いかにこのことが必要であるかを体験を基に論じている。

山本さんの作品は大きく三種類の紙の構成によりできている。一つはグレーに近い新聞紙の厚みを持った立体「立ち位置」。二つはカラーコピーを束ねた中型の「泳ぐ魚」。三つはカラー用紙やチラシを用いた薄型で絵画的傾向のある「思い出」。

研究発表展では「立ち位置」を中心に「泳ぐ魚」「かみのけ」をサイドに置き、壁一面に「思い出」の小作品を天井高くあるいは床にインスタレーションした。ここにこの三年で削り出された山本の視覚的効果を持ったオブジェたちが効果的に配置され、表題通りのレイヤー表現：リズム・ゆらぎ・ズレが完結したといえる。

特に「立ち位置」のような立体造形は、絵画的思考の作品とは別に、周りの空気を押し出すような不思議な存在感に満ちていた。

山本久美子の作品のクオリティーとユニークな持ち味は今後の作品に期待できるはずである。

作品審査及び論文審査ともに絵画領域のそれぞれの表現分野の審査員、論文審査員の数回にわたる審議があり、本論文は課程博士の学位論文に相当するものであるとして全員一致の合格と判定することにした。